

品川虚空藏菩薩奉額會

准主 夫南里

額の部

川柳評

昔々新井陣の幕の夜の宴 米車

杉人多鶴家十人うも粟と運ヒ 雷

安全と笈も走らま渡海の初 全

神楽を教よおどろぬ納鶴 子う五

秘一満の育うた海も 子う五

坪の山を縁國で又かおる京の雨 子う五

月よ遠くあるは夜をこし留まの山 米車

花ト
米車
空
柳枝
喜瓢
雷リ
全
竹草
近遊

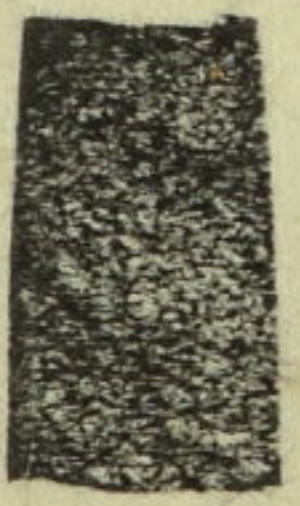
花ト
米車
空
柳枝
喜瓢
雷リ
全
竹草
近遊

花ト
米車
空
柳枝
喜瓢
雷リ
全
竹草
近遊

花ト
米車
空
柳枝
喜瓢
雷リ
全
竹草
近遊

命終るも病首のむさあ酒 近遊
 さー引の汐を時年お船の飯 甲う五
 人の為るがたありせぐ美塘り 全
 昔うららのやうみかえぬ花の露を 佳友
 高うあえ氷只成せく山棲 永里
 孝女の危が新くて新うらう 雷
 孫の法を承お医者もえて常と 常丸
 移てえぬ多鶴いなき親の恩 山樂
 先へんぞそ意地ころの纏 喜瓢

石切と大工とうらと下り 満月
 うらうらと苗賣いぬい物もよひ 音琴
 首を曲ての考へるもくせう彫り 佳友
 のびるとも知くは高打の水ツをる 林鶴
 村墓おし人の田地もころう工支 満月
 家並もまき石切の地で紙きぬさ 近遊
 うらうらとまき唐土の一里塚 鼠
 卯はあらうと強のうら日お氷さ 甲う五
 作る年暮る其くあはれ砂糖細



江戸の形 難も荒い氷巻ひ
次の宿の方ぐる度なる火打箱
完くうらな成也一桶破の大丸ひ
面と向入と口ごめるをその
端まきせし男とえくを 柳枝
あざむぐの如きふ傘張二本備り
尾 比細折飛治長刀へふくおきん
音琴

米車評

多くがより玉の電せし 我南辺
呂三

菩薩ハ引るぬ之井ちの荒哉
為新がり事尋る 的もあし
和分所を何れも 梶 辞 退
鬼のあしと点さく成さるくあの子
花は目もさまる風雅な物見哉若
毛纏へ名席者のを然りたり
口ゆふ氷巻るる長柄の 鶴
修驗坊妻どころあれた地獄の画
よそれよりあゆまたぬ首衣りき
柏葉



獲ふども願ふ天竺の夏をうせ 柳袋
 お見もらるる村内のめらる 雷
 竹戸柵あけておぼがゆきゆくや 満月
 時多きさしぬを猫よツイとろれ 南行
 うきとくまき唐子の一里 塔 鼠
 我屍紙を分れる豚と矢立を 満月
 船の雪膏のつわりがチチちがひ 山樂
 黒ねをそくそく張引のり物 柳枝
 さくらい物に合筆よさる眼帕ちく 化笑

品四

婦んや〜とをぐ〜と遊ぶをさう五 五
 狐の尻玉状勢がうみはく〜 金成
 今夏のふくそありおと下女アミ 玉善
 枕抱く及具のうろむあつる身 雷
 頭毛〜とちが布袋の幣脊負 柳枝
 ぼんぼりぞ教人灯のさま 柳枝 雷

新富評

孝行なるもが起〜と知うろ 雷
 用う心ハ風も蒼の衣花扇 此里

又花が負てくやどしがあてりさう
 玉善
 足る人ときみそりへる 町花御 墨丸
 ちことやよ版のあいの浪花組 玉善
 為朝がわらぬるぬる 酌もあー 花甚
 和ちよとより麦湯けさあとのも知らぬ
 くらぬ
 たりあ味とをささる許由なうぐひ 雷
 安南のいさうの完とこもぬあ 我南辺
 物とさくあひ竹馬の鳴干物 雷
 家相見の子も癒癒でふさぎ完 雷

四五

みあはある柄せよこのあどでま 全
 家ういの結家腎虚を表彼の国者あ 全
 有てもあだ坊の解難あし 満月
 千と流地民者勝る月よ 調味 雷
 尻折まきう見物ハあ流抑キ 近遊
 内あうが用さんたらん様の尻陀 カメ丸
 断舎で後一をいの影城うけ 米車
 るよ 鞭うのくと田舎のちやう医者 雷
 按戸の送品わみつるまの 米車

又六の川畱眼くらぬグぬり
 せう出のやうに沙引りく鳴 佳友
 不川へ既と後舟引りく鳴 柏葉
 月見の余餘能場と市山 玉善
 かくし山葵を伏勢よきとやう 太九
 伏勢のやうにくしと山葵あし 化笑
 後河原の見世橋よと畱の畱士 山樂
 きたるやこれけみおしとの重の不二 木卯
 新畱の拂いさきまかると晒屋 正午

品六

後河原屋並坪系物も畱士と核 正午五

我南辺評

難と難人競乃大夢傳 祖山
 現水年常グ入々九十川 満月
 瑞鏡を名標よと刻かされ 新富
 協助は同人バ東海寺と交へ いろは
 中あもあめへをせやそのり月と 雷
 指折のるる扇が集る春の云 正午五
 岩ツきりゝ葉ツとこそとく 體 鼻仙

三下り海が西をよぶエラ
 サテあつてんぞ
 能及者貨屋入西のふせとの
 鼻仙
 豆ぐうのまめ我をきき以煮へ
 雷
 以先衣車力忘れてきこごうホイ
 全
 背中がたつて版をきくを後國
 米車
 を眼急用え定てりうシヤベリ
 雷
 だうぶうよえくを風よ納の舟
 玉善
 家根の垢売縣汗をど船の考
 雷
 洞板の雲糞屋はうまぐうき
 祖山

品七

備りらまゐる物あう亀よ二三百
 鼠
 役軍の終持行がむるが人り
 雷
 喰とぬひ就をのり砂と番を桶
 近遊
 聲のえんてんちのともるふ食
 満月
 アラビヤを大骨と中女思の
 全
 羊のあ力余つてめうるが
 夫也
 安南の角力完ううる月張る
 月五
 むとこの縣言るあせはあうく
 柏葉
 けなぐまて小舟ハ波よ必わんぞ
 月五

江戸名流ハ岡東ベイの兄考 林鶴
光政ハ晦日の園またちうを
送りしりて 澁壺のぞく 杉の藤
ふ 柏ふぬき 船妻の袖のしみ
そは又は 病うがし やうふはし
正午 都々一

川柳評

臣のぬれ衣は 舊衣の仁ふ紙
は 體のこころ 平安このみ 奏し
孝の徳園の様は 拙をさへ
雷 全 全 全

品八

片袴うら 妙典の 叙をとと
世は 廣く 笑申り 純ガ 摺り云
ぬれ衣は 仁ふ紙 どのいさく ぬれ衣の 慈
難と 難へ 難乃 大が 一ん
王仁は たらせ 和を 香ど 唐の 学
忠の 徳杖 袖ふも あり 雅人の 園
花の あり 花終 切ら 傍おし む 情
世より 名譽の こころ 忠士の 柏 庇
は 眼鏡の 曇り 鏡考が 息吹く け
夫也 夢勢 彫久 山樂 祖山 雷 全 全 全

鷗も眼がゆきと和分の煙がえく 雷
 卑各とふ底成さぐらぬ清川 叶
 いんて結をんと解らるさぬハキ 鼻仙
 海のふれた奈良なるのふら溪おち 夫也
 傍の代が拾得ひ智恵をえり 音琴
 清金成あまんとそ他金成うけ 夫也
 茅柿ハ視とふ字こけと 困 米車
 形房が眼ふれた歌の智れと成に くらめ
 和分ハ踏ぬを藤のさくらこけ 山樂

品九

系とふふふあきふぬ馬舌の種 鼻仙
 を威風自然と武づらねのぬり 米車
 よよあ人押ふられぬ和分の女 くらめ
 深雅の青味難吹のふらう 鵜 木卯
 寸あて香ハ気尻形のおきま立 我南辺
 うた別是車医自烟で月を拭ひ 全
 遠至と武部ハ立て梅人さくら くらめ
 長櫃の中にも降葉のこぼれ土 雷
 謙の刃張通れ吉井のさるの氣 米車

蛇と殺しんぬあはる徳と清み 雷
 金根の若きよりさぬぬ大悟の眼 栄川
 去鶴と落ても後よ放生 倉 金成
 衣食住ともよあ人ば妙の恩 佳友
 下ろみ付よ星もろ 犬とろみ 米車
 ちどろ死て死ともえ捨死脱ハ逆 里童
 同ひくれば鶴の常多の海斗り 平五
 半井ハ家の病ひもよくえまけ 我南辺
 つまんでまへば舌も若幸の根 くらり

品十

かろ火のあはるよやく人の 波 引板等
 多成 破るまどきの女犯戒 平五
 乃徳も徳ど我々の大咄よふ 夫也
 身とくらんぞんと居て味方鼓 米車
 宝剣のまろ先がさわまろ 山笑
 牛あふのまどと違ふあふのろく 逃遊
 あはるの整結書を海先と申で 雷
 うろひてやまろいさ由拳白又ん 全
 あよ和吉國のまつりも茶しつら 山樂

辛月雨で幅後より布の水
 山笑
 堪者の等々をくすくす
 我南辺
 水増して引ぞ出ぬ
 後の船
 またる
 急あせよんてろくろく
 音琴
 八丈の圓又船底の守り
 繼ヒ
 我南辺
 入あろぬた葉好む
 志のべ山
 栄川
 その徳は人々をくすくす
 雷
 やどう木のこぎ事
 花をちる悦櫻
 山樂
 林梅
 花香あふる
 葉白
 霜
 株木

品土

倉のそばに名医も教はる
 五
 雲ぬくく火吹梅の有る
 雷
 鷹くくど狗もあつ
 墨丸
 毒肝の花うけしき
 倭者の智
 五
 とう泥が賣らまよ
 有さ
 鼻仙
 秋人と鬼が
 川
 米車
 その年の雞ハ
 滝が
 遊
 麻杖とつた
 角月立
 遊
 玉の緒とる
 綱放
 遊
 網子丸
 栄川

茶のころやを念めがゆよよる
 我南辺
 白雪と休て暮いき人てうせ
 株木
 以海を度子十括合せる井戸の四
 満月
 る古唄よ今日の是を歎枕
 五
 卯の祭の雪よ簾まく洗髪
 佳反
 存の爲る長者一誘ころげこも
 五
 鶉杖持のころゆれよ方ッの難
 五
 されとる態改盜ぬ人のこあ
 遊
 能病と誓ひ化物尻よせだ
 雷
 品十一

難よ六の目どお世六のぞみふー
 彫久
 世事きく悟りよをまの岸の寺
 五
 作園の魂魄をこて福ハゆれ
 満月
 都とてをばくさるる鼻の光
 清風
 豆扱を鬼狐追おす大晦日
 五
 間者をと化す山科の狐あん
 金成
 ちけとくうう治濃田の橋もさ
 里童
 毛谷村と赤村が腕よりへこみ
 林鶴
 是の外の跡うむ及吐ごうけ
 祖山

雲舟る鯉の志れて縁成定しどし
 月う五
 昭ぬのの妻よあみおろ枝の藤
 山樂
 赤紙焼て粗妙下縁成あつ付る
 我南辺
 化の火よ迹る坐田の常持り
 山樂
 魚の難骨酒壺の秋更み出
 鯉瓢
 うさるゑのみ火中と喚かされ
 満月
 樂天の行と打ぬくどろく屋
 雷
 花とらんははらぬ名柔見え
 長来
 仙如と文成雲とありぬとぬれ
 米車

品十三

奴の尻の方と如く豆腐の記
 永里
 冨士越と酒まろくける大蛇丸
 山樂
 千上つと紀文を角がえんとて
 林鶴
 又よる峯又藤の星懸の月
 月う五
 外へ乳のちろぬ望りの星の宿
 全
 徳石切志とぬおのまろが翁さび
 雷
 村系名名ろく名引明子縄
 月う五
 湯のろに枝持志をろくまろく糸俵
 こむめ
 心ろくと壺きふおてまろくを印冠若
 満月

あねのひをたてて知年よ涙あきり
村役より初るあり 赤 蛙
ふみやぐる奴あうくの土へ埋
雲よりみづけをまきとるん申を玉子
朱の糸末よとれ初ハ鳩の、かん
年の末鞠もも蝶の竹張き
花の中吸骨をけりてさうのびき
どんくよまおし船のいそふとん
亀のあせんべの片を初るあねの蝶

雷

化笑

音琴

満月

米車

今

五

米車

山楽

品十四

形彫りうそ人と緋屋切ぬける
糸の雲をよふ梅木猫が非
ち蒲切持の陣通のえまか
さうまきうひせは又宗徳の縁の宿
立石よ道さく物戸をよるま
極熱夜ト初よりととと踊り
雛さぬをたよりよ仕家親の舟
ぬの日の川よ素山子の小船
相油のくふ春雨の日の小船

梅吉

雷

五

今

米車

此里

雷

音琴

余は自らの菓子折中いたるぬつら
持病のちうぬつらうど張賸雨考
酒の切るもくびるまをヤ戸忘れ
版が余つて喰うおる葉漬元世
うらうらあよころりくくと純の練
その迄余ま袖うそころあま
敬庵甲よ一心まころる 女乃 眼
ちんくくとまを商人を賄斗おー
る附力る扇百里を たまこみ

雷

こぬめ

林鶴

鼠

アウ五

彫久

音琴

米車

木卯

品十五

第の水育チ溜ッと気がゆとま
叙ぶけ白く目よ中ける梳の糸
あくび斗りおをゆさるゆい文よあだ
考このつく瓜盗人の眼乃たをれ
為成者の紐成いさく初るつら
足跡留つまころみ糸とをた遠い
口キの樽ゆよ欲のたをあやん
そのま附らるりおやく村の巻ン
うけらりと素柄破人者 箸

引板等

雷

今

化笑

株木

雷

林鶴

柳袋

亀成

名も地もこの所の小豆湯
 夢勢
 岸も揚子吹りとの玉烟草
 金成
 切つとよりきくぬ小指が乳をのこり
 林鶴
 筆ハ生かす 幽霊と画く魚拳
 里童
 五子とまの生破とりのみ脊中
 新富
 雲助は四人バ東海寺と押へ
 いろは
 今ある長田鉄炮を風呂くむけ
 彫久
 化されとやう又田中の鴉吉 鴉
 満月
 井戸がなま横綱を引くは南力
 雷

雲末雲白をいれとてまけぞ
 林鶴
 月をさるをか解宜くはり雲末雲
 引板等
 雲の日の裏白表より書
 満月
 天窓とびくぬ乳乳と長くせは
 こまめ
 つがーあん大佛解も鉄とあり
 米車
 お岩の磯張今朝の抽味嚼 釜
 全
 ささくひく切る 焼と海 若
 里う五
 一村と有卦と入せるをやう 神
 華ト
 珍のせりく樂器なるとも曲ゲ



三つもの中へ入ると牡丹餅
 油屋の雛へ吐息の花ととけ
 指とらせ綾とさる物縄引
 五臓圓足せぬ外科の長谷義
 暫女が描引柏木乃村日待
 一たのふと二杯目か茶ありて
 羊年の落力か余ッてありて
 おく戸よ先キできれととの糸
 時を斗ッて愛よまると水油
 米車
 鼠
 米車
 全
 龜成
 雷
 天也
 米車
 正午
 品十一

外為一交婦二雨又風を引
 杉箸よ茶のよと湯の木の芽あり
 安南の角力沈ううへん返り
 舌づの出を指先が出で障あへ眼
 涸板の雪麴屋のうきうき
 猪を御人ふところもあさまり
 樂へふ夕良あうぶ格子先
 朝の雪膏の横りゲチトちぐい
 切て煮る昆布よ煮か巻出れ
 歌六
 五
 全
 蛙柳
 祖山
 音琴
 雷
 山樂
 遊遊

うらたてゝ我友の自六吉の吟干物
況法の筑へ海をわうとよみ
時節をきく桑の長ッ尻
武者まあれとらこのごと火根前
芋てはる緒ハ教むも尻もせは
白も成ると猫めがかりとぎ
仲る割勝記提て換よきし
火縄賣る奴で一休骨をわ
君子やこれとを考らむ堀とり

我南辺

米車

丸和

米車

満月

化笑



米車

とらめ

品十八

